

道徳科学習指導案

指導者 T 1
T 2

- 1 日 時 令和3年 1月27日(水) 第5校時
- 2 学 年 八幡小学校第5学年(女子2名)・6学年(男子3名・女子3名)
- 3 場 所 5・6年教室
- 4 主題名 ほこりある郷土【内容項目C 伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度】
- 5 ねらい 「わが故郷に教育を」という信念のもと奥愛次郎が日彰館創立・発展のために注ぎ続けた生涯に学ぶことを通して、郷土の伝統・文化を愛しさらに発展させていくべき責務を自覚させ、その実現に努めようとする態度を育成する。
- 6 教材名 「わが故郷に教育を＝日彰館と奥愛次郎＝」 【自作教材】

7 主題設定の理由

○主題観・価値観

自分が生まれた故郷はその後の人生を送るうえで心のよりどころとなるなど大きな役割を果たすものである。故郷を離れた人々は帰省の大渋滞の憂き目にあいながらもお盆と正月には帰郷し、お墓参りをしたり旧友との再会を喜び合ったりする。「ふるさとの訛り懐かし駐車場の人ごみの中にそれを聴きにゆく」この句を詠んだ啄木は東京での暮らしが逼迫しているために帰省がかなわなかった。しかたなく東北の列車が発着する上野駅に東北訛りを聴きに行ったのである。せめて方言を聞きこで故郷の情景を思い起こすといった切なく悲しい句である。この例のように郷土は生きていく上での大きな精神的な支えとなる。その故郷を愛する心は自らの学びと体験を通して培われる。故郷の伝統文化・自然・産業などを学び、お祭り・イベントなどに意欲的に参加することで芽生え育まれる。自然の美しさや人々の生きざまに触れ感動する中で、故郷を誇りその伝統を継承していこうとする意欲が育成されていく。そのためには、故郷の歴史・自然・産業・人々と自分の生き方との接点を見出すことが重要となる。「『あなたの故郷はどんなところですか?』と外国の人に尋ねられた時に答えられない学生が多い。自分の生まれた故郷・国を十分に知らずして他国の文化や風習を理解できるわけがない。」という報道を耳にした。フランスを始めとする他国では学校教育で自国の歴史・文化・伝統・芸能をしっかり学ばせ、自国を誇る児童生徒を育成する教育が重視されていると聞く。過去の歴史と故郷の偉人に学ぶことで現在の自分との関りを明らかにすることで、国や郷土を愛する心情を育成しなければならぬ。その豊かな感性を育んだ後に、国際社会において我が国が果たすべき役割を自覚させていくことが望まれる。

本校の児童は地元にある吉舎中学校・日彰館高等学校へ進学する者が大多数である。しかしアンケートでは日彰館高等学校創立の歴史について知る者はいなかった。普段何気なく買い物の途中で車窓からその校舎を目にする程度である。しかし奥愛次郎を初めとする先人の寄付や多大な尽力によって私学日彰館が、我がふるさと吉舎に創られた経緯を知ればその見方・とらえ方は違ってくるはずである。当時はどの家も貧しく高等教育を受けることのできる者は裕福な家の生徒に限られていた。県北の若者は教育の機会に全く恵まれていなかったのである。それが奥愛次郎と吉舎町の有志の尽力により「地元の人々の理解と協力で校舎が建てられ15人もの生徒が吉舎で高等教育を受けることができた」のである。その功績がいかに素晴らしいものであったかが理解できよう。故郷の偉人奥愛次郎の生きざまに学ぶことで故郷の良さを再発見する一助となればと思い本単元を設定した。

○教材観・指導観

本教材は、漫画「私学日彰館(岩田健太郎) 菁文社」をもとに自作した教材である。奥愛次郎は慶応

元年（1965）年七日市の醤油製造の商家に生まれ、結核のためわずか39歳という若さで亡くなるまでの期間に私学日彰館を創立した郷土の偉人の一人である。その活躍の場は明治時代となるが、当時広島県には文部省の定めた正規の県立学校は広島と福山の尋常中学校の2校のみで、三谿郡からはわずか1名しか進学できなかった。大半の家は貧しく働き手が必要で学校どころではなかったのである。奥家も富豪と呼ぶにはほど遠く、学校創立資金は寄付以外になかった。明治31年までに86人の賛同を得て私学日彰館を設立することができた。弱冠29歳の年の偉業であるが言わば「大衆カンパ」で建てられた学校である。東京の寄宿舎住まいとなってもひたすら賛同者を訪ねての寄付集めである。卒業生と共に日彰館の教育理念を説き、驚くべきことに300人以上の政治家・書道家・画家の家を訪ね回っている。このように「日彰館を建て維持するのに何が大変だったのか」はアンケート結果を見るまでもなく、知る余地もない。「あれども見えず」と言うがこうした先人の苦勞・努力というものは知らなければ見えない。今日に至る歴史や経緯を知ることによって初めて先人の努力や工夫に気づき、驚きや感動が生まれる。それらを知ることにより故郷の良さを再発見し、ひいては郷土愛を育むことができる。学習指導要領によると「我が国の発展に尽くした先人の業績に目を向け受け継がれてきた伝統文化を尊重しさらに発展させていこうとする態度を育成すること」とある。県北高等教育発祥の地となった日彰館と奥愛次郎の壮絶な人生に触れ、故郷の伝統・文化を学んでいこうとする心情を育てるためにこの教材を自作した。奥愛次郎との初めての出会いを自分の生き方と交錯させていくために以下のような展開を工夫したい。

まず導入で「なぜ吉舎町には都市部の著名人の作品がたくさん残されているのか」という課題を投げかけることから授業を展開していきたい。「人の価値はお金ではない」を問うことで当時の教育背景を知るとともに「田舎にも貧しい生徒にも教育の機会を」と提言した奥の教師理念（思想）を考えさせたい。奥は偉大な教育者でもあった半面その生涯の大半は結核と闘いながら資金集めに東奔西走する実業家でもあった。何の縁故もない東京で故郷から大学進学の道を切り開くために一軒一軒頭を下げて寄付や作品をお願いするのは屈辱以外の何物でもない。当時の教師は傲慢で上から目線で生徒を厳しく指導する者が多かった。奥は正反対で過疎と貧困による社会的弱者を救うために、ひたすら「頭を下げ続けた」人物なのである。中心発問では「血を吐きながらも家を回り続けた気持ち」を問うことで、自分の生命を賭してでも日彰館を存続させようとした「衆縁和合」の精神を想像させたい。ステージ発問1で初対面の奥に作品を寄贈してくれた芸術家の思いを問うことで、並々ならぬ奥の信念・情熱を想像させたい。ステージ発問2で貫き続けたものを問うことで奥の信念を明確化させていきたい。さらにステージ発問3で修学旅行で行った松下村塾を引き合いに出し、命を賭して国を変えようとした吉田松陰の教育熱と同じものを持ち合わせていたことに気づかせたい。あわせて萩市では今なお保・小・中で尊敬をこめ「松陰先生」と呼び、その生き方や思想を学び続けている事実を補足し、創始者は亡くなってもその思いは引き継がれていること（引き継がれるべきであること）に気づかせたい。未来に広げる発問では「日彰館を。日彰館をもっと良くしなければなりません。」の最期の言葉に私たちはどう応えていくべきなのか」を問うことで、自分自身の生活や考えをふり返らせたい。自我関与しにくい児童には「今の自分のできることを」問ったり「八幡子供太鼓・パレッタ」の例を引き合いに出したりすることで考えさせたい。まとめとして事前アンケートと今の思いを比較させ自分の故郷に対する心の変容を交流したい。その中で「知ることで新たに見えてきたこと」を確認しあい、故郷を大切にしていこうとする心情に結びつけていきたい。

8 指導のポイント

ステップ	学習展開	ステップの視点	本時の工夫
1	導入	【チャレンジ】 ○課題把握 ○動機づけ（価値または教材）	○「吉き舎り道徳学習プログラム」の流れを生かした価値への動機づけ
2	展開 （中心発問）	【考えをあきらかにする】 ○考えの根拠の明確化	○ノートへの記述
3		【さらにさらに問いを見つける】 ○自他の意見への問いの連鎖	○児童の発言から次の問（課題）を考える。

4		【未来に広げる】 ○自己との関りを深める工夫	○繰り返し発問をくり返す中で自我関与させる。
5	終末	【未来へのヒント（明日へジャンプ）学習を振り返り】 ○価値の一般化，自らの生き方への意欲付け	○学習のふりかえりから評価する ○「吉き舎り道徳学習プログラム」の流れを生かした価値への動機づけ

吉舎（きさ）と未来（考えをあきらかにする，さらにといを見つける，未来に広げる）

9 伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度

	目標	キーワード
低学年	我が国や郷土の文化と生活に親しみ愛着を持つこと	親しみ愛着を持つ
中学年	我が国や郷土の伝統と文化を大切に，国や郷土を愛する心をもつこと	国や郷土を愛する心
高学年	我が国や郷土の伝統と文化を大切に，先人の努力を知り，国や郷土を愛する心をもつこと	先人の努力を知る

10 心の吉き舎りプログラム

心の吉き舎りプログラム名	「先人や先輩の生き方に学び八幡の伝統を引き継ぎ，創造しよう」	
めざす資質・能力	共感力・コミュニケーション能力・表現力	
めざす児童・生徒像	人の気持ちを考えて親切にできる子 友達と力を合わせる子 地域を大切に思う子	A(1)…善悪の判断 B(9)…友情，信頼 C(15)…伝統と文化の尊重，国や郷土を愛する心
ねらい	奥田元宋・小由女先生の作品を模写し芸術性を学んだり，先輩から引き継いだホレッタ・八幡子供太鼓を演奏したりすることで郷土の伝統と文化を継承しようとする心情を育てる。 さらに吉田松陰・奥愛次郎の教育活動を知り「演舞」を創造していった経験をもとにそれらを後輩へとつなげていこうとする態度を育てる。	

「先人や先輩の生き方に学び八幡の伝統を引き継ぎ，創造しよう」

過程	児童の意識の流れ	道徳科	教科・領域・行事
発見 気づき	○昨年に引き続き奥田元宋先生の芸術に学ぼう ○萩にもたくさんの文化・歴史・伝統があるから吉舎と比較しよう ○コロナ禍だからこその新しい伝統を創り上げよう	7月 「ぼくのお茶体験」 C 伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度 ・相手を敬ったり気遣ったりする気持ちを形として表す作法の意義を理解し，受け継がれてきたわが国の伝統や文化のよさを感じ，大切にしようとする心情を育てる。 10月 「天下の名城をよみがえらせる＝姫路城＝」	○奥田元宋先生の作品の模写 ○修学旅行の下調べ 「萩焼の歴史を調べる」 「粘土に絵付けをする」しよう 「吉田松陰の松下村塾を調べ私学の歴史学ぶ」 ○スポーツふれあい祭り 新しい伝統となる「演舞」の発表

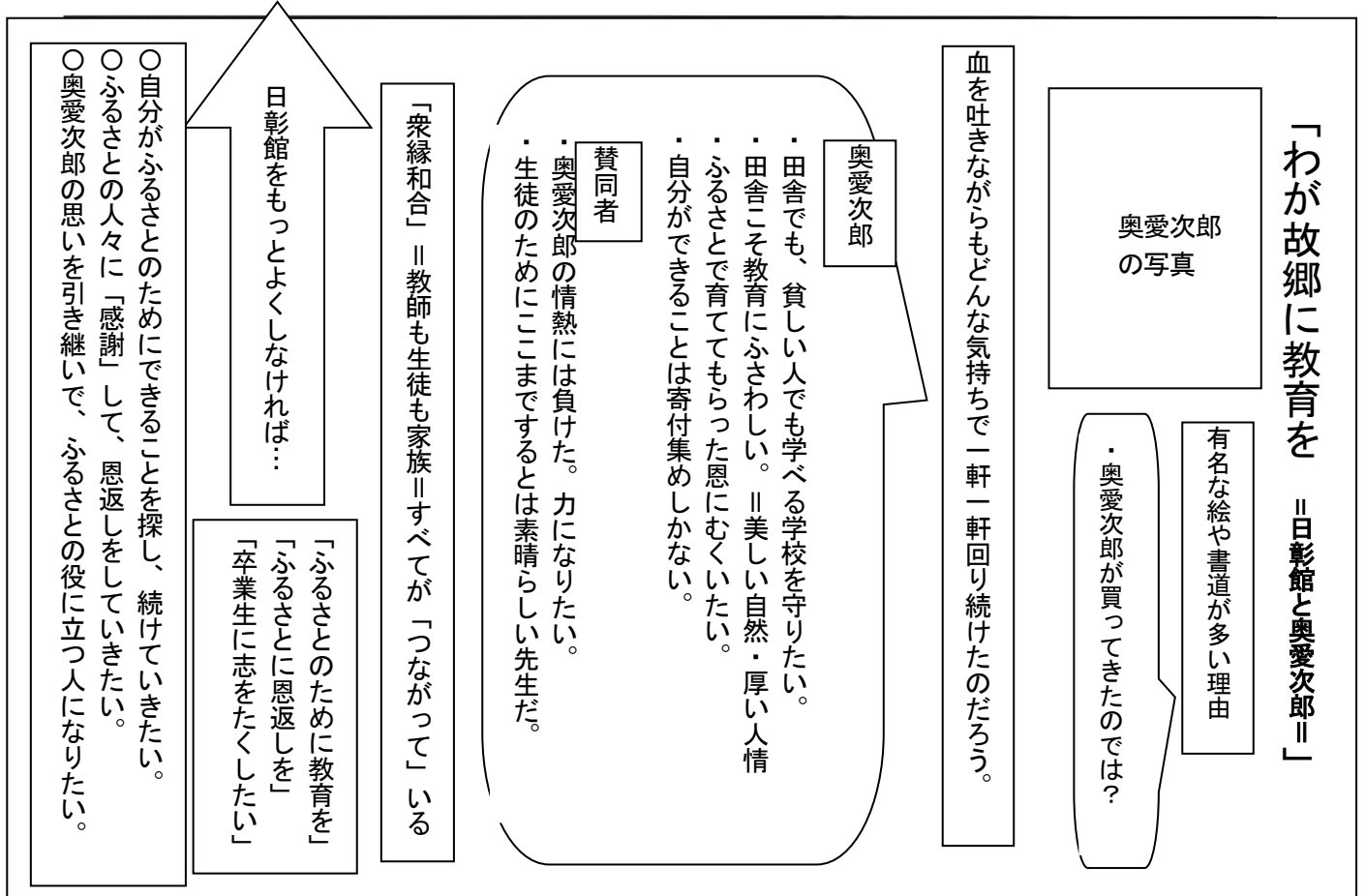
	<p>○先輩の思いを引き継ぎ 31 年目の八幡子供太鼓・19 年目のホレッタを全力で発表しよう</p> <p>○「草鞋づくり体験」に参加し故郷の歴史と技を学ぼう</p> <p>○奥田小由女先生に文化勲章受章のお祝いの手紙を書こう 先生の作品を模写しよう</p> <p>○マラソン大会でも歴代記録を目標に練習し新たな伝統を築こう</p> <p>○故郷の偉人に学び新しく知った事感じたことを発信していこう。</p>	<p>C 伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度</p> <p>・祖父の語りを聞いたひろみの驚きを通して、先人の知恵のすばらしさを理解し郷土や我が国の伝統文化を受け継ぎ、後世に残すために大切にしようとする心情を育てる</p> <p>1 月 「わが町に教育を＝日彰館と奥愛次郎＝」</p> <p>C 伝統と文化の尊重・国や郷土を愛する態度</p> <p>「わが町に教育を」という信念のもと奥愛次郎が日彰館創立・発展のために注ぎ続けた情熱を想像する事を通して、ふるさとの偉大な先人の生きざまに触れ、郷土の伝統・文化を受け継ぎ、大切にしていこうとする心情を育てる。</p>	<p>○参観日での発表・ピオネットによる地域発信。 「八幡子供太鼓 (31 年)」 「ホレッタ (19 年)」</p> <p>○「草鞋づくり体験」に自主参加 (ほぼ全員)</p> <p>○奥田小由女先生への手紙 作品模写</p> <p>・ピオネット・中国新聞を通しての地域発信 ・奥田元宋・小由女美術館見学</p>
--	---	---	---

11 準備物 教材, 資料, 道徳ノート, 発問短冊

12 学習展開

	学習活動	主な発問と予想される児童生徒の心の動き (◎中心発問)	T 1	T 2	指導上の留意点 (☆評価の観点)
導入	1 アンケートの考察をする	○関心の低かった項目を中心に上げる ・日彰館の創立者は奥愛次郎と言って吉舎町の人である。	発問 交流	板書	
展	<p>2 教材「わが町に教育を」を読んで話し合う。 (1) 理由を自由に考える</p> <p>【考えをあきらかにする】 (2) 寄付を集め続ける奥愛次郎の心情を想像する</p> <p>【さらに問いをもつ】 (3) なぜ1万2千もの賛同者が現れたのか? 何に共感し</p>	<p>○「わが町に教育を」を聞き、話し合ひましょう。 ○日彰館・吉舎町に有名な画家や書道家の作品が多い理由を想像しよう。 ・奥愛次郎が買ってきて寄付したから。 ・奥愛次郎が買い集めて日彰館や吉舎町に売りさばいたから</p> <p>◎血を吐きながらも、どんな気持ちで家を回り続けたのでしょうか。 ・日彰館を守りたい。 ・田舎でも学べる学校を続けたい。 ・自分も生徒も家族だから大切にしたい。 ・自分が作った学校をつぶしたくない。</p> <p>(Stage1) どんな気持ちで賛同者は見ず知らずの奥に作品を提供したのでしょうか。</p>	<p>範読 発問</p> <p>発問</p> <p>発問</p>	<p>板書</p> <p>発問 板書</p> <p>発問 板書</p>	<p>○奥愛次郎と吉舎町のかかわりについて関心をもたせる</p> <p>○道徳ノートに記述させることで自分の考えに向き合わせる。</p> <p>○賛同者の心情を推し量ることで奥愛</p>

開	<p>たのか？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ふるさとの生徒のために一軒ずつ回り続ける奥愛次郎の熱意に負けた。 ・東京には学校がたくさんあるけれど田舎にはないから助けてあげたい。 ・貧しい人にも教育を受けてもらいたい。 ・3大主義は良いことだと思った。(共感した。) ・苦勞している先生たちの力にもなりたい。 <p>(Stage2) ずっと変わらず思い続けたこと(買ったこと)は何だろう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分のできなかった勉強を引き継いでほしい。 ・田舎にも貧しい者にも教育を受けさせたい。 ・田舎こそよい教育ができる。 ・ふるさとの恩に報いて役にたちたい。 <p>(Stage3) 松下村塾を開いた吉田松陰と似ているところは？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・命がけてペリーにアメリカ行きを頼んだ。 ・牢屋でも勉強を続け塾を開いた。 ・若くして(30歳)でなくなったが多くの弟子を残し明治維新につながった。 ・教育のために命を注いだ。 	<p>発問</p> <p>発問</p> <p>発問</p>	<p>発問 板書</p> <p>発問 板書</p> <p>発問 板書</p>	<p>次郎の人柄・信念・理念を理解する。</p> <p>○T2もその都度切り返すことで次の発問へと結び付けていく。</p>
終末	<p>【未来に広げる】</p> <p>(4) アンケートに出された意見を比較する</p> <p>(5) 自分の生活を振り返る</p> <p>(6) 未来へ広げる考えを見つける。</p> <p>(7) 教師の説話を聞く。</p>	<p>○私たちは最期の言葉にどう応えていくべきなのか？ (補) 授業の最初のアンケートと今の気持ちで変わったことがあれば教えて下さい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奥愛次郎のことがわかってよかった ・奥愛次郎の思いを忘れないようにしたい。 ・日彰館を大切にしていきたい。 <p>(補) 自分の生活をふり返ってみてどう？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・もっと勉強や運動をがんばりたい。 ・地域の人にあいさつをしたい。 ・故郷の行事に参加したい。(草鞋作り体験参加者ほぼ全員) ・オペレッタや八幡子供太鼓の伝統を引き継いでいきたい。 <p>(主) 最後の言葉にどう応えていくべきか？</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奥愛次郎は命がけて日彰館を作ったことを知ったのでそのことを伝えていきたい。 ・ふるさとの良さを伝えていきたい。 ・ふるさとにご恩返しをしたい。 ・奥愛次郎さんの意志をついで勉強しふるさとの役に立つ卒業生になりたい。 ・奥も松陰も亡くなってもその思いは受け継がれている。それを大切に守っていきたい。 <ul style="list-style-type: none"> ・「明倫館小学校の松陰先生の朗読」の記事を聞く。 ・八幡子供太鼓と奥田元宗・小由女先生の作品模写の新聞記事を紹介する。 ・年賀状のお礼に届いたミカンの話 ・地域行事(草鞋づくり)への参加 ・オペレッタのビデオ配信 	<p>発問</p> <p>発問</p> <p>発問</p>	<p>発問 板書</p> <p>発問 板書</p> <p>発問</p>	<p>○学んだ価値について自分の生活や経験を振り返り、これからの自分に生かす思いを道徳ノートに記入させる。</p> <p>☆先人の努力を知り故郷を大切にしていこうとする気持ちをもとうとしている。(発言、ノート)</p> <p>○自分たちの取組がふるさとを活気づける力となっていくことを確認し、今後の意欲付けとする。</p>



萩「明倫館小学校」は吉田松陰の松下村塾と深い関係をもつ小学校だ。だからこそ全学年の児童が声高らかに松陰先生の教えを朗読する時間を毎日とっているという。30年以上続くこの朗読は学期ごとに言葉が決められており6年間で18の教えを朗読するそうだ。3年生の2学期は「志を立てて もって万事の源となす。書を読み て もって 聖賢の訓（おしえ）をかんがう」を朗読していた。意味は「志を持つことが第一であり、書物を読むことで聖人や賢人の教えを参考として、自分の考えをまとめることが大切だ」という意味だ。子供たちが大人になった時本を読むことをわすれないだろう。志や至誠を持つことの大切さに気付くだろう。こんな教育と経験を与えてくれた萩という地域と明倫館小学校には誇りが生まれ故郷を大事にする気持ちも高まるだろう。よく環境は人をつくら と言われるがまさに明倫館小学校は日本一と言っていいのかもしれない。「ビジネスの達人」中島セイジより引用